

高騰する飼料コストとのあくなき闘い

～アメリカ生産現場における意識と取り組み～

Swine Extension & Consulting (スワイン・エクステンション&コンサルティング)

獣医師・獣医学博士 **大竹 聡**
satoshiotake@hotmail.co.jp

はじめに

前回は触れましたが、穀物価格の高騰はアメリカ養豚生産者をますます圧迫してきています。最近、昨年と比較すると豚価も下がってきているので（2008年4月現在）、飼料コストとの闘いはさらに切実味を帯びてきています。「我々は養豚経営を行ううえで、既に“バイオエネルギー”時代に突入した！」と明言されていたことから象徴されるとおり、バイオエタノールによる穀物価格高騰の波に対し、何らかの具体的対策を講じる必要に迫られていることは間違いありません。その問題に対し、アメリカはどのように取り組んでいるのでしょうか？ 生産現場でできることは何でしょうか？

アメリカでは今後もトウモロコシ・大豆が主役

アメリカ養豚産業の飼料原料の主役は、今後もトウモロコシ・大豆であることは間違いありません。トウモロコシ価格高騰が相変わらずプレッシャーになっていますが、市場の原理で、アメリカ中西部においてはトウモロコシの価格の上昇に比例して、大豆・麦などすべての穀物原料の価格も同じく引き上がります。なので結局、アメリカ中西部では常に、トウモロコシが相対的に最も“安い”畜産用穀物ということになります。

従って、「飼料コストとの闘い」であるにも関わらず、飼料の中身そのものが大きく変更されることは今後もないでしょう（少なくともアメリカ中西部では。サスカチュワンなどのカナダ西部ではバイプロダクトによるリキッドフィーディングが比較的普及している）。

では、どこでコストを削減するのでしょうか？ 結論から言うと、バジェットフィーディングのさらなる厳密な実践、飼料浪費の極力削減、死亡・増体悪化を招く疾病をさらに徹底的に叩いていくしか方法はあります。

前回ご紹介したAASV学会（アメリカ養豚獣医師学会）で、今年は疾病のトピックがとくに多かったこと、さらに哺乳子豚の下痢やマイコプラズマなど、今までPRRSやサーコの派手さの影にまぎれていた病気にもいくらか焦点が当てられていたことから、そのような飼料高騰の背景が強く示唆され

ていると言えるでしょう。

アメリカで実践されている具体的な取り組み

現在、アメリカで実践されている飼料コスト削減のための具体的な取り組みは、大きく分けると以下のように特徴づけられるのではないのでしょうか。

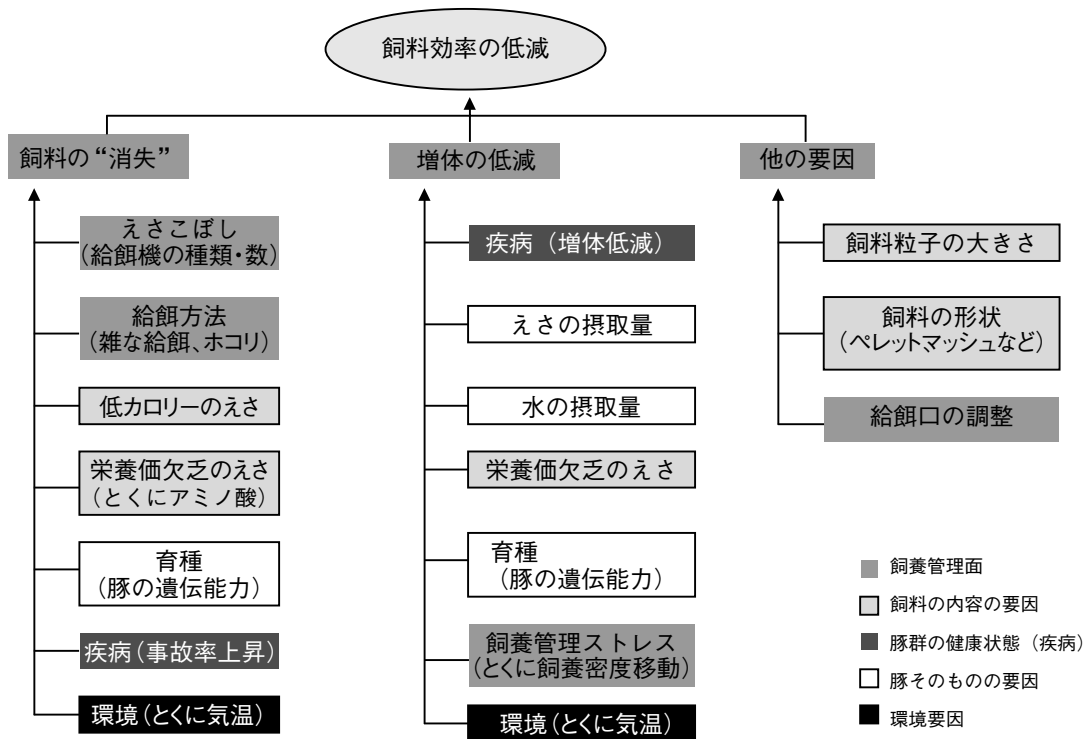
(1) 代替的な飼料原料の使用

誰しもが真っ先に考えるのが、「トウモロコシ・大豆より安い原料を使えば、飼料コストを今より削減できるはず」ということではないのでしょうか。確かにそのとおりかもしれませんが、その代替物を利用した際の栄養価のバランス・増体・枝肉品質が、トウモロコシ・大豆をフルに使用した場合と同じであるという前提がなければ、結局は“安物買いの銭失い”となってしまいます。この命題に対するアメリカの回答は（少なくとも現段階では）、バイオエタノール副産物であるDDGS（発酵トウモロコシ蒸留粕）の有効利用です。配合割合が多すぎると枝肉の軟脂の問題が出ますが、現在ではその有効割合も研究されており（10～15%までなら大丈夫）、アメリカにおいてはDDGSはもはや“代替物”という位置づけではなく、“標準”飼料原料の1つと見なしてもよいほど普及し、実用化されています。生産地・工場別による品質の規格化、輸送の難点などの課題が今後克服できれば、日本の養豚生産への貢献も十分に期待できるでしょう。また、DDGSに限らず、日本特有の代替原料活用の可能性ももちろんあるでしょう。ただし、重要なことは、その代替物がどんなものであっても、その栄養価・経営的価値が国際標準と同じ“ものさし”により科学的に評価されたものでなければならない、という点です。

(2) 飼料配合設計の安全率を狭める

各原料を配合設計する際には、栄養学的に必須とされている量よりかなり多めに含有するのが定石です。これを“飼料配合の安全率 (margin of safety)”と呼びます。配合プロセスによる最終物のバラツキを加味しての“安全率”なわけですが、昨今の飼料高騰事情のなかで、この安全率をいかに狭

図1 飼料効率を阻む要因の系統樹



S. Otake

めた設計で (即ち必要な原料を必要最小量の設計で) バラツキを少なく飼料配合できるか、という点が重要になっています。また、それに応じてより厳密な栄養価分析・栄養学的知識・バジェットフィーディングのノウハウも必要になってくることから、栄養学に特化した現場コンサルティングのニーズも増してきています (カンザス州立大学栄養エクステンショングループなど)。

日本でも、リキッドフィーディングや飼料米の可能性について少しずつ新しい試みが実践されています。方法論だけにとらわれてしまって本来の目的を見失わないためにも、現場で通用する栄養コンサルティングの確立と普及が今後、日本でも必ず必要となります。

(3) 出荷戦略

肥育豚出荷のタイミングと出荷先パッカーの臨機応変な選び方が、最終的に肥育の利益を最大限に享受するために重要なポイントとなります。えさ高の現在、その重要性はさらに増しており、そのための知恵・技術・ツールをもつことがより大事になっています。

その実例として、アメリカでは複数大手パッカーに肉豚を出荷したときに、生産者の利幅を最大限にできる出荷体重とトウモロコシ価格の関連性が分析されており、農場経営に役

立てられています。そしてその分析いかんによっては、増体を最大限にする配合設計が必ずしも経営的に最良ではない場合があることも判ってきています。増体を最大限にすることだけにこだわって、その分エネルギー価の高い高価な原料を多く長期間給餌するよりは、増体が少し犠牲になったとしても飼料コストを抑えて、体重が小さめの出荷豚をできるだけ高く買い取るパッカーと契約する、というような経営戦略がその良い例です。

日本市場では、また勝手が違ってくるでしょうが、いずれにしても、できるだけ生産者自身が主導権を握る形で販売戦略を個々に確立することが、今後ますます農場経営の良し悪しを大きく左右する決め手となることは間違いありません。

(4) 各農場の問題点の把握から始まる管理の改善

最後にもってきましたが、この点が何よりも重要です。冒頭でも述べたように、農場現場で飼料効率を阻む要因は、飼料そのものの中身よりむしろ飼養管理と衛生管理によるところが大きいのです。そして、飼養管理・衛生状態はそれぞれの農場によってすべて異なってきますので、まずは「自分の農場で飼料効率を阻んでいる最も大きな要因は何か？」を正確に把握できなければ、飼料の内容をいじったり最新技術の給餌技術を導入したとしても、望んだ結果は得られないでし

よう。

飼料効率を阻む諸要因の系統樹を図1に作成しました。皆さんの農場で飼料効率改善を図るためのトラブル・シューティングの参考として活用していただければ幸いです。

おわりに

必ずしもインターネットや雑誌からマクロ的な数字を拾ってこなくても、このように毎日の現場における疾病対策・飼養管理などの生々しい側面から穀物価格高騰の影響は垣間見えています。もはや単純に、「えさこぼしに気をつけろ」というだけのレベルの話ではなくなってきました（もちろん、まずはそこからですが…）。「バイオエネルギー時代に突入」とは、単にエタノールによるトウモロコシ価格高騰だけを意味するのではなく、「養豚生産コスト全体が高騰せざるを得ない状況下で、考えられるすべての側面からアプローチしてコストパフォーマンスの良い養豚経営をすることこそが今後、生き残る絶対条件となる時代」ということを示しているのだと筆者は思います。そしてさらに言えば、この意識は何も最

近出てきた目新しいものではなく、昔から言われている養豚経営の“王道中の王道”にほかならないのではないのでしょうか。

逆に言えば、上述したような飼養管理・衛生対策におけるポイントや意識づけこそが、即、今日から自分の農場でも実践可能な飼料効率改善の第一歩ではないのでしょうか。これなくしては、代替原料の活用や設備投資を伴う副産物リキッドフィーディングもすべて宝の持ち腐れで終わってしまうでしょう。

養豚経営における飼料コスト高騰という極めて深刻な問題を前に、「最近はえさが高くてね、困った世のなかになった…」などというような“お茶のみ時事ネタ”で終わらせずに、その問題に対して「自分の立場で具体的に今、何ができるのか？」を集中的に考え、実践していくことこそが、最も健康的な道なのではないのでしょうか。今回は、その方法を具現化するためのヒントになるのではないかという意図で情報提供させていただきました。

© S. Otake